寄稿　1ページのたより

私は絵描きです。昨年、初めての絵本「きのこぼうやともりのおしごと」が出版されました。この絵本の題材となった「きのこ」について書きたいと思います。

きのこの魅力に気づいたのは20年程前、食べ物としてよりも造形の美しさに惹かれ、きのこ柄の服や雑貨や本を集めていました。絵を描くことも好きだったので、自分でもきのこを描くようになりました。

東日本大震災の時は、夫と当時1歳の娘と3人で福島県福島市に住んでいました。美しく、美味しい食べ物がたくさんある福島で娘を育てられて幸せでしたし、これからもずっと好きな絵を描きながら、家族や友人たちとここで平和に暮らしていくのだと信じていました。しかし原発事故が起こり、とても悩んだけれど娘が小さかったこともあり、北海道へ移住しました。

その後も細々と、創作活動を続けていました。私にとってきのこ作品の制作は、自分を癒し、存在意義を確認することでもありました。

ある時、SNSで作品の写真を載せた際、見知らぬ人から「なぜ福島の人がきのこ作品を作ってるの？あの事故のせいできのこを採って食べられなくなったというのに！」と、文面からも怒りが伝わるコメントがつきました。原発事故で拡散された放射性物質をきのこたちが吸ってしまうので、野生の美味しいきのこを気軽に採って食べられなくなった、ということのようでした。もしかしたらその見知らぬ人も、やり場のない複雑な気持ちをぶつけずにはいられなかったのかも、と今なら想像できますが、当時の私は考えもしなかった反応に驚き、傷つきました。

そのことだけが理由ではありませんが、私は思うように制作できなくなっていき、福島出身だということを表に出さなくなりました。きのこたちにも、大好きな故郷にも申し訳なく思っていました。

そんな中、私は北海道の公園や森に生えている本物のきのこにも興味を持ち、写真を撮ったり、種類や特徴を調べるようになりました。そして撮影したきのこの写真に絵を描き加えた作品をSNSに投稿するようになると、絵本編集者の方から「きのこの絵本を出しませんか」と連絡がきました。私はいつか絵本を作りたかったので、すぐに引き受けて、制作のためきのこを探しに毎日森へ通うようになりました。

きのこと向き合う中で、どんな毒きのこでも美味しいきのこでも、絶妙なタイミングで姿を現して胞子を飛ばし、役目を終えたら消えてゆく姿を目の当たりにし、私は感動を覚えました。今まで見た目の美しさに気を取られていたけれど、森の中のサイクルの一部として、何も言わずただ命を全うして森全体を豊かにしている、その存在自体がとても美しく、愛おしく思えたのです。こうしてできたのが絵本「きのこぼうやともりのおしごと」です。

きのこたちのおかげで、どこで生まれ育ったとか傷ついたとか、私の中ではあまり大きいことではなくなりました。私もきのこのように、真っ直ぐ生きていきたいと思います。

（やまだみかこ）

「きのこぼうやともりのおしごと」やまだみかこ（著）WAVE出版　2022・10・7
今年の春、福島へ帰った時に、本と一緒に撮影しました。